病は消滅する。ここに内観、存思、坐忘の姿をみる。

その他、具体的な記述として、「草木方訣、生物方訣、灸刺訣、神祝文訣、方薬厭固相治訣」等があり、これらについても紹介したい。

（吉元医院）

中国古代医学における陰陽について

家本誠一

中国古代医学はわかりにくい。その理由の一つは陰陽という言葉の概念がつかみにくいということに在る、と思われる。しかも、この陰陽という言葉は中国古代医学のあらゆる局面にしみわたっていて、此の医学の重要な構成要素となっている。それ故に、陰陽がわからなければ此の医学はわからない、ということになる。陰陽は中国古代医学を考えるものにとって、避けることの出来ない課題である。

思想史の上でも、陰陽は重要なテーマである。殊に易の基礎的概念として問題にされている。この場合、陰陽は先ず宇宙を構成する事物の分類原理であり、すべての物事は陰陽何れかに分けられる。次に、陰陽は物事の生成消滅の動因であり、運動（機能）の原理であり、その消長盛衰によって現象世界が成立する。

思想史の上ではこのように理解されている陰陽は、医学の上ではどのような働きをもっているのか。以下、これについて考える。

先ず、その重要性について、素問霊枢は次のようにいう。人間のからだは陰陽を離れては存在しない。陰陽は生体の基本的要素だ（人生有形、不離陰陽）。故に診療に当っては陰陽を判別することが先決となる（善診者、察色按脈、先別陰陽）。そして、鍼の道というものは陰陽を知ればそれですべてがわかる。知らなければ此の道はおしまいだ、ということになる。

このように重要な言葉であるが、現代人にはその概念が仲々つかめない。その理由は陰陽の多義性に在るように思われる。その情況は次の通りである。

素問においても、陰陽は分類原理である。天地日月星辰、寒熱水火、男女。自然と人生の諸相はすべて陰陽に分かれる。人間のからだも亦同じで、生体の臓器組織は陰陽に分属する。生体の表裏内外上下左右背腹も夫々陰と陽に分けられる。体表に在る皮毛筋骨は陽であり、内臓としての五臓六腑は陰である。更に臓腑も、臓は陰中の陰、腑は陰中の陽と、陰陽の気の濃淡によって再分類される。かくして生体の構造は陰陽濃度の勾配の上に整理され、体系づけられる。即ち、陰陽は先ず生体の部位、位置的関係を指示するものである。併しながら、これに止まらず、脈状や脈所にも陰陽があり、症状にも陰陽がある。形態にも生理にも病理にも陰陽が出て来て、一体この陰陽は何をさしていっているのか、判断にまようのである。

この多義性をその基底において支え、統一している本体は何なのか。それは機能原理としての陰陽である、と私は考える。それは次のように定義されている。

(1) 陰者蔵精而起亟也。陽者衛外而為固也。
(2) 陰者在内、陽之守也。陽者在外、陰之使也。
(3) 陽予之正、陰為之主。清陽発腠理、浊陰走五臓。清陽実四支、浊陰帰六腑。

ここに陰の臓する精とは生体エネルギーを意味している。即ち、陰はエネルギーを貯蔵し、必要に応じて放出する働きをもち、陽は陰から放出されたエネルギーを消費して四肢体表の機能を営む、というのである。

精、即ち生体エネルギーは水穀（飲食物）より生ずる。水

穀のもつ栄養素を五味という。その味には蔵する所のものがある。即ち、精である。水穀の精は脾胃三焦において生体の精に転化する。この精は（営）血（衛）気として抽出される。気血はエネルギーの担体として経脈に従って全身を循環し、筋骨臓腑を灌流する。ここに営血は陰の、衛気は陽の働きと連動する。このエネルギーは四肢・九竅・皮毛筋骨の運動・知覚・栄養・防衛・発汗の諸機能の遂行に消費される。

陰陽は此のエネルギーの生産・貯蔵・放出・消費の全過程に関与し、これを調節する支配機構をなすものである。現代生理学に比定すれば、生体調節機構としての神経内分泌系に対応するものであり、これを二元的に構成したと考えられる。陰は主として同化的に、陽は主として異化的に機能している。

従来、陰は副交感神経系に、陽は交感神経系の作用に対応する、として来た見解はそれ程見当違いのものではないように考える。全く一致するものではないであろうが。

生体の臓器組織の陰陽、又、脈状や症状の陰陽は、此の意味での陰陽が、夫々優位を示している部位・現象として理解される。

生体の諸機能、呼吸循環泌尿排便、又、睡眠発汗セックス等における陰陽の機能、更に疾病の病理における陰陽の関与については、別に論考を用意したい。

（家本医院）